喜壽の祝に寄せて

わが駒沢大学にとって今年ほど祝福すべき年は少ないと思われる。それは総長と二人の学部長が揃って喜寿を迎えられたからである。とくに商経学部にとっては、学部の生みの親である森荘三郎学部長、笠森伝繁第二学部長がともにこの賀年を迎えられ、同じ学部に籍を置くわれわれ後輩一同にとっても、誠に喜ばしき年といわなくてはならない。

森先生は、いまさら申し上げるまでもなく、わが国経済学界の耆宿である。とりわけ御専門の「社会保障」及び「生命保険論」では、その開拓者であり、文字通り同学界の元老である。現在、保険業界の第一線で活躍しておられる多くの経営者が、森先生の学徳によって育てられた方々である。

笠森先生もまた、わが国農政学の第一人者の一人として、農政の第一線で実践的活動に東奔西走しておられる。変革期にあるわが国農政の指導育成の上に果しておられる役割はすこぶる大きいものがある。

しかもなお、お二人とも学究として若輩も及ばぬ学問的研鑽を未だに続けておられる。時々学内でお目にかかると、われわれの専門分野の学問にも突込んだ質問をなされ、新しい学問の摂取にも並々ならぬ関心を寄せられる笠森先生の、まるで青年のそれのような頭脳の若さ、御専門分野の研究会を自ら主催され、第一線の若い研究家を今なお指導しておられる森先生の若々しい研究意欲、ともにわれわれ後輩として頭の下がる思いである。また教壇に立たれても、そのきびしい御講義の態度といい、発刺たる御講義ぶりといい、われわれとして大いに学ばねばならないところである。文字通り身心

ともに鬘鑠と申し上げてよい。

常日頃、両先生の人格と学風に接し、敬愛の念をいよいよ強めているわれわれ後輩として、両先生の賀年に当り、ささやかながらも祝意を表したいとかねてから念願していたのであるが、ここに日頃の学恩への感謝の意も含めて、わが駒沢大学商経学会で発行している研究論集の第四号を記念号として発刊しようということになった。むかしは、年寿の祝をするとき公家（文官）では多数の人々に和歌をよませ、その歌を屏風に書いて、お祝の座敷に立てるしきたりがあったと聞くが、短かく、つたない歌の一句一句にも、祝賀の真心があふれているところに意味があったと思われる。同じようにこの記念号も、ささやかなまずしいものではあるが、われわれ執筆者一同の心からの祝意がこもっているという意味で、両先生に喜んで受け取っていただけるものと期待している。

わが商経学部も、すでに創立以来十数年を経て、いよいよ盛大におもむきつつある。しかしまだ駒沢大学の八十年に亘る歴史からみれば、少年期をようやく脱しつつあるという状態である。これを心身ともに健やかな発刺たる青年に育て上げるには、両先生の指導育成にまたねばならぬところが非常に大きい。今後もいよいよ御健康に留意せられ、御長寿を保たれ、微力なわれわれのよき指導者、よき相談相手となっていただけるよう心から念願する次第である。

昭和三十八年十月

駒沢大学商経同人会